

## 今日の説教のポイント<ルカによる福音書 18 章 9~14 節>

### ①このたとえの語られた相手は誰? — 自分の正しさにうぬぼれている人

「うぬぼれる」の原語は「自分自身を確固とした拠り所として立つ」という意味です。自分のアイデンティティー（主体性、自分性）を確立することは大切ですが、自分のその在り方や考え方を絶対の真理正義としてそれに依存して立ち、それをはかりとして他者をも評価するのが（だから見下すのです）うぬぼれなのです。そのうぬぼれは当然他者に聞こう学ぼうとはせず、神にも本当には耳と心を閉ざします。自己絶対化の一つのあらわれであるそのうぬぼれがいけないのです。

### ②うぬぼれる人の典型 — ファリサイ派の人

うぬぼれはどうしても外にあらわれます。11 節の語感を酌んで訳すと、「ファリサイ派の人々は(ずかずかとやって来てすくつと)立ち、心の中で(自分自身に向かって)祈った」となります。彼は自分の正しさ善さを並べ立てて、「神様、…感謝します」と言います。確かに、私たちが何らかの善事をなすことができたとするなら、それは神の支えと恵みによることであって私たちの偉さに基づくことではなく、ただ謙遜な感謝が神に向けられるだけです。しかしこのファリサイ派の人は、その感謝を自分に向かってしゃべっているのです。うぬぼれは、結局、絶対に立派な自己への称賛、満足、感謝であり、祈りさえも（その自分に向かっての）独り言に過ぎないものとするのです。

### ③自分は赦されねばならない罪人であることを知る人 — 徴税人

異邦ローマの手先となって税を取り立てる徴税人は、同胞のユダヤ人たちからは異邦人扱いされ、罪人や娼婦と同列の者として疎外されました。神殿に来て「遠くに立ち、目を上げようとせず、胸を打ちながら」祈る徴税人の姿は、自分の罪を悲しむしかない彼の内面をあらわしています。しかしここでしっかりと心に刻んでおかなければならない一つのことがあります。それは、彼の卑下謙遜が彼を義とするのではないということです。「義とされて(受動態)家に帰ったのは…」と言われた方が、これから自分がしようとしていること（十字架の死と復活をとおしての赦罪）を前提にして、この言葉を語って下さっている—そのことをこそ視野に入れておかなければならないのです。（桑原昭）